

港区立郷土歴史館

歴史館だより

□ title

特別展「日本・オーストリア国交のはじまり 一写真家が見た明治初期日本の姿」
オーストリア＝ハンガリー帝国「公使館」と港区域

□ name

石田 七奈子
(学芸員)

本年は、明治2(1869)年に日本とオーストリアが国交を結んでから150周年の節目に当たります。特別展では、この記念の年に修好の歩みを振り返るとともに、当時、来日したオーストリアの写真家が今に残した明治初期の写真ならびに当館所蔵の写真を通して、港区域を中心に明治初期の日本の姿を紹介しています。その中でも日本とオーストリアが国交を結んだ際の港区域とのかかわりを紹介します。

明治2年9月3日(10月7日、以下丸括弧内は新暦の日付)、オーストリア＝ハンガリー帝国の特派全権公使アントニー・ペッツ男爵らは高輪接遇所へ入りました。日本や中国、シャムと修好通商航海条約を結ぶべく旅立った東アジア遠征隊のメンバーの内、条約締結の全権を皇帝から委任されていたのがペッツ男爵です。彼らが来日し、条約を取り結ぶための交渉を望んでいるとの連絡は、当時のイギリス公使・パークスから明治政府に伝えられていました。その後もパークスは

オーストリア＝ハンガリー帝国との仲介役をつとめました。そうした背景もあってか、ペッツ男爵らが明治政府と交渉する間、東京での滞在施設となったのは、イギリスが使用していた高輪接遇所でした。

高輪接遇所は泉岳寺門前(現在の高輪二丁目にある泉岳寺前児童遊園の一画)にあった実質的なイギリス公使館です。公使館としていた高輪の東禅寺で度重なる襲撃を受けたイギリス側から、新たな公使館を建てるように強く要望された江戸幕府が慶応2(1866)年に建設しました。立派な門が設けられていた様子が館蔵の浮世絵「東京名勝図会 高輪英吉利館」に描かれており、本展でも展示しています。

滞在中、高輪接遇所にはオーストリア＝ハンガリー帝国の旗が掲げられ、遠征隊の一員であるオイゲン・フォン・ランゾネ男爵は手記に「たけなわ〔高輪〕にある我々の公使館」と記しています(註)。

ペッツ男爵は、そこで日本の外交担当者と交渉を進め、明治2年9月12日(10月16日)皇城へ参内して天皇に謁見、皇帝から託された国書を渡します。そして、9月14日(10月18日)、高輪接遇所で条約書に調印が行われました。

条約締結後、東アジア遠征隊は帰国、オーストリア＝ハンガリー帝国は横浜に本拠を置き、三田の願海寺を東京での止宿先として借用していました。その後、東京に公使館を置くべく用地を探したようですが、場所が定まらず、築地、木挽町、永田町、三田小山町(現、港区三田一丁目)、白金志田町(現、港区白金一丁目)、紀尾井町と移転をくり返しました。大正3(1914)年に第一次世界大戦が勃発した際、国交は中断され、第二次世界大戦後の昭和30(1955)年に再び国交が樹立、その後現在の大使館(港区元麻布一丁目)が設けられました。国交を結んだ当時から、今も港区とのかかわりが続いています。

(註) オイゲン・フォン・ランゾネ男爵の手記については宮田奈奈氏(オーストリア・シュタイレック城美術館・文書館主任研究員)にご教示いただきました。

参考文献

ペーター バンツァー著、竹内精一・芹沢ユリア訳『日本オーストリア関係史』(1984年、創造社)

港区立港郷土資料館『江戸の外国公使館』(2002年)

川崎晴朗『明治時代の東京にあった外国公館』(2)、『外務省調査月報』2012年No.1)

川崎晴朗『明治時代の東京にあった外国公館』(5)、『外務省調査月報』2014年No.2)



東京名勝図会 高輪英吉利館(当館蔵)

□ title

令和元年度 新指定文化財について

□ name

川上 悠介
(学芸員)

港区は、文化財保護条例が施行された昭和54(1979)年から毎年数件ずつ文化財指定を行っています。今年度も、9月27日付で港区の歴史に関わる重要な建造物1件、美術工芸品1件、古文書2件の計4件を指定しましたので紹介します。



旧公衆衛生院

1. 建造物 旧公衆衛生院 1棟

港区立郷土歴史館が入る「ゆかしの杜」が、「公衆衛生院」として建設されたのは、昭和13(1938)年です。地下1階・地上6階・搭屋4階建ての鉄骨・鉄筋コンクリート造の建物で、内田祥三よしかずの設計、大倉土木(現・大成建設)の施工、米国ロックフェラー財団の支援により、日本で初めて公衆衛生を専門に研究する厚生省管轄の施設として建設されました。港区は国からこの建物と土地を取得し、建物の歴史的価値を損なわないよう構造補強などの改修工事を実施しました。外観・内観ともに昭和13年の特徴ある姿を良く残した貴重な建造物です。

2. 彫刻 木造二天立像 2躯

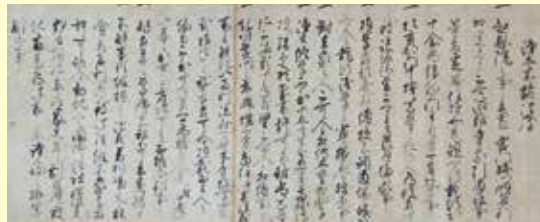
この像は、享保元(1716)年に建てられた、有章院(七代将軍徳川家継)霊廟二天門(重要文化財)に安置されている木造の二天像です。平成27(2015)年から令和元(2019)年、4年の歳月をかけて門の修理工事が行われ、その期間に、像は都内の修理工房に移され修理が行われていました。像の内部をカメラで撮影したところ、享保元(1716)年の年記の他、二十八世法橋康傳(京都で幕府・朝廷の造像に携わった七条仏師)という仏師名が確認されました。像は門と同時期に制作されたことがわかると共に、徳川家の霊廟にふさわしい名のある仏師の作品であることも明らかになりました。



木造二天立像

3. 古文書 徳川秀忠署判浄土宗法度 1点

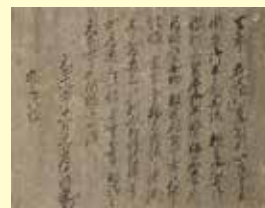
元和2(1616)年11月に発給された江戸幕府の寺社法度で、増上寺が所蔵しています。宛名は増上寺、二代将軍徳川秀忠の花押が記されています。形態は卷子で豎紙を継いで料紙としていますが、その継ぎ目裏には秀忠の印章が黒印で押されています。前年7月に徳川家康の花押が記された浄土宗法度も発給されており、家康の死去後、秀忠が家康の対浄土宗政策を継承したことを示す資料として貴重です。家康の浄土宗法度は「増上寺所蔵文書」14通の中の1通として指定されており、秀忠の浄土宗法度も同様に価値があるものとして追加指定されました。



徳川秀忠署判浄土宗法度

4. 古文書 曲直瀬家文書 106点

初代曲直瀬道三(1507~1594)をはじめとする曲直瀬いまおし(今大路)家に伝来する文書で、慶應義塾大学に保管されています。内容は、朝廷や幕府が曲直瀬家に対して発給した文書や処方した薬の記録などです。曲直瀬家は天正2(1574)年に正親町天皇おきまちに召される一方、徳川家康のもとで仕えたことを契機に幕府の医師となった家です。医学関係の記録はもちろんですが、豊臣秀吉など、時の権力者との交流がわかる文書も含まれ、貴重な古文書です。



曲直瀬家文書

港区立郷土歴史館

MINATO
CITY
LOCAL
HISTORY
MUSEUM

アクセス 東京メトロ南北線・都営三田線
「白金」駅下車 2番出口徒歩1分
都営バス「白金駅駅前」停留所下車徒歩1分
※駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。

開館時間 午前9時~午後5時(土曜日のみ午後8時まで)
※入館受付は閉館の30分前まで。

休館日 毎月第3木曜日
年末年始(12月29日~1月3日)
特別整理期間

歴史館だより 第2号

令和元(2019)年10月19日発行
発行：港区立郷土歴史館
〒108-0071
東京都港区白金台4-6-2 ゆかしの杜内
電話：03-6450-2107
FAX：03-6450-2137
<https://www.minato-rekishi.com>

